

インドネシア・中部フローレスにおける 未婚の女性首長をめぐる比較研究

—オーストロネシア研究の視点から—
その2

杉 島 敬 志 *

A Comparative Study of “Unmarried” Female Chiefs in Central Flores, Indonesia: An Austronesian Perspective Part 2

SUGISHIMA Takashi*

In a previous paper on indigenous polities and their origin myths in the Lionese-speaking area of central Flores, eastern Indonesia [Sugishima 2017], I explored the Austronesian context in which an “unmarried” sister of the supreme chief assumes the status of female chief in Lise Tana Telu, the largest Lionese chiefdom. Although not all chiefdoms have such a female chief, it is widely recognized that the primordial cross-sex sibling bond in mythical, ritual and other forms is the source of life at the level of indigenous polity. Such siblingship at the polity level takes various forms in the Lionese-speaking area. As a sequel to the previous paper, this article examines on the basis of my recent field research in central Flores the hypotheses and typologies of the diversities previously presented. It then expands the scope of comparative research to the Rajadom of Sikka, which extends to the east of the Lionese-speaking area. In the concluding remarks, phenomena that may be the subject of the comparative research are listed from central part of insular Southeast Asia and Polynesia, and the directions in which future research should be developed are envisioned. One of them is a critical reconsideration of Sahlins’ theory of stranger-king [e.g. Sahlins 1981, 2008], which does not take into account the fundamental importance of the primordial cross-sex sibling bond in indigenous Austronesian polities.

は じ め に

インドネシア・フローレス島の中部（以下「中部フローレス」）には未婚の女性首長がいる。

* 放送大学, The Open University of Japan
2020年2月25日受付, 2020年5月8日受理

女性首長はその兄弟である高位の男性首長とともに在来政体の中核部を構成している。本稿は、『アジア・アフリカ地域研究』第16巻2号掲載の「インドネシア・中部フローレスにおける未婚の女性首長をめぐる比較研究—オーストロネシア研究の視点から」[杉島 2017] の続編であり、前稿同様、両首長間の兄弟姉妹関係から出発し、比較研究の範囲を拡大しながら、東南アジア島嶼部と太平洋の島々に住むオーストロネシア系の言語を話す人びとの在来政体に特徴的に現れる、結婚によって分離されない兄弟姉妹関係を分類し、記述するためのタイポロジーの構築を目指す。本稿の目的は3つあるが、これが第1の目的である。

第2の目的は、前稿で示したタイポロジーがその後のフィールド調査でえられた資料にも適用できるかどうかを検討することである。そして第3の目的は、中部フローレスのリオ語(sara Lio)が話される地域(以下「リオ語域」)から、その東に広がるシッカ語(sara Sikka)が話される地域(以下「シッカ語域」)へと比較研究の範囲を拡大することにある。リオ語とシッカ語はともにオーストロネシア語族の言語だが、前者はビマ＝スンバグループ(Bima-Sumba Group)、後者はティモール地域グループ(Timor Area Group)に分類され、語彙的にも文法的にも大きな違いがある[Wurm and Hattori eds. 1981-1983]。

本稿の目的との関連で2つのことを付言しておきたい。そのひとつは親族と政体を区別し、切り離して議論することについてである。親族は人類学において政治、経済、宗教を社会的に組織する多機能的な媒体あるいは枠組として論じられてきた。それゆえ、政体と親族を切り離して議論することの意味がにわかには理解されないかもしれない。だが、親族の位相ではインセストが禁止されるのに対し、政体の位相では夫婦になった兄弟姉妹が政体の中核部を構成するなどの、次節以下の記述にしばしば登場する一連の事象は、親族と政体が兄弟姉妹をめぐる相反する別個の事象領域として成立していることを示している。

もうひとつは、政体の概念にせよ、親族の概念にせよ、それらの有効性はこの比較研究の内部に限定されており、その外部的な含意を現時点では考えていないことである。本稿での議論を人類学的に敷衍することで、婚姻や婚姻から生み出される関係性について、レヴィ＝ストロースが『親族の基本構造』[1977]で示したような一般論を提起できるだろう。だが、筆者はそうした一般論の構築に関心をもてない。当面のあいだ筆者は、人類学的な敷衍とは距離を保ちながら比較研究を進めたいと考えている。

リオ語域はタナ tana (土地、大地、領地)とよばれる多数の在来政体に区分されている。この政体はオランダ植民地政府やインドネシア共和国の統治機構や行政単位(県、郡、村)との関係で変化しながらも、現在にいたるまでリオ語域の大半で人びとの生活に大きな影響力を保ちつづけている。以下ではこのような在来政体を「首長国」とよぶ。他方、シッカ語域の大半はシッカ王国の領域に組み込まれていた。

フローレスの面積は14,300 km²であり、四国(18,800 km²)よりひとまわり小さい。リオ



図 1 中部フローレスの言語と首長国

語域は、2つの行政区にまたがり、東西 60 km、南北 40 km の範囲に広がっている（図 1 参照）。シッカ語域はシッカ県内にあり、その広がり東西 70 km、南北 20 km である。1980 年代初頭の推計で、リオ語の話者（以下「リオ人」）は 13 万人、シッカ語の話者は 18 万人とされている [Wurm and Hattori eds. 1981-1983]。その後、インドネシアの人口は 1.5 倍増加する一方で、国語のインドネシア語しか話せない世代の人口が多くなり、両言語の話者数を知することは非常に難しくなった。

中部フローレスの南岸地域には古くからムスリムとカトリック教徒の集住地が点在していた。たとえば、後出のパガ Paga 村は、17 世紀初頭以降、カトリック教徒が集住する地域として文献に登場する [e.g. Visser 1925: 281-292; Heuken 2008: 78, 81]。だが、リオ語域の大半は、カトリックの宣教活動が本格化する 1910 年代まで世界宗教の影響をほとんど受けてこなかった。他方、シッカ語域の大部分を占めるシッカ王国におけるカトリックの歴史は 16 世紀にまでさかのぼる可能性がある [Lewis 2010: 117]。

リオ語域にある首長国の数を確定することは難しい。数え方しだいで変わってくるからである。だが、50 を大きく上回ることはいないだろう（図 1 には本文で言及される首長国の大まか

な位置だけを記す)。未婚の女性首長はそのすべてに在るわけではない。臆測をまじえていうと、未婚の女性首長がいる首長国はその2割程度ではないだろうか。以下では表現を簡素化するために「未婚の女性首長」を「女性首長」と略称する。

「k」と「h」の音韻交替に着目すると、リオ語は2つの方言に区分される。この2つを「K方言」と「H方言」とよんで区別する。H方言が話されるのはリセ Lise, リセデトゥ Lise Detu, ンドリ Ndori, プー Bu, ムブリ Mbuli, モニ Moni という6つの首長国である。以下ではこれらの首長国を「H方言域」と総称する。H方言域はK方言が話される地域（以下「K方言域」）を南北に縦貫しており（図1参照）、K方言域は東西に分断されている。H方言域の西側のK方言を「西K方言」、東側のK方言を「東K方言」とよぶことにしよう。

本稿の構成は以下のとおりである。第1節では前稿の論点を整理する。ただし、論点を明確化するために、前稿にはない議論やデータを適宜挿入する。第2～3節では西K方言域内の女性首長のいる首長国を、第4節では西K方言域内の女性首長がいるとも、いないともいえる首長国をとりあげ、前稿で提示したタイポロジーを検討する。第5節では東K方言域の首長国とシッカ王国をとりあげ、比較研究を東側に拡大する。そして結論部では、比較研究の対象になると思える事象を東南アジア島嶼部とポリネシアから列挙するとともに、今後の研究が展開される方向性についてのべる。

1. 論点の整理

リオ語域で女性首長に就くのは、首長国のなかで他の首長に優越する男性首長の姉妹である。この兄弟姉妹には首長国民の生活を成り立たせる豊穡多産の源にかかわる信仰や儀礼が絡みついている。こうした源は、オーストロネシア諸語に広くみられることだが、植物隠喩 (botanical metaphor) によって「根幹」(pu'u) と表現される。根幹には「原因」という意味もある。したがって、豊穡多産の源と、そこから生命をえることで営まれる生活は原因と結果の関係にあるのである。このことを考慮にいれ、豊穡多産の源を「因果根」とよぶことにしよう。上記の兄弟姉妹は、この因果根と固く結びついた存在であり、首長国に豊穡多産をもたらすために因果根とかかわる儀礼（以下「豊穡儀礼」）を遂行する。

中部フローレスにおける生業について簡単に触れておくと、シッカ語域でもリオ語域でもかつて生業は焼畑耕作だった。前者ではオランダ植民地時代からココヤシ栽培が広範囲におこなわれるようになった。後者では1970年代からチョウジ等の商品作物が栽培されるようになり、現在では主な現金収入源になっている。

こうした生業は親族集団との関連で営まれている。リオ語域の首長国についてのべると、首長国の領地は多数の土地に区分されている。こうした土地は特定の父系集団と結びついており、その成員の生業活動はこの土地内で営まれる場合が多い。本稿の末尾でヌア nua（村）と

よぶ親族の領域はこのような意味での土地に相当する。また、後ほど「根幹首長」(mosa laki pu'u), 「母父首長」(mosa laki iné amé), 「長大首長」(ria béwa) など何種類かの首長を区別してのべるが、彼らは土地と結びつく父系集団の長である点では同じである。彼らが明確に差異化されるのは首長国レベルでおこなわれる儀礼の役割においてである。それ以外の首長国レベルでの役割の分担はあっても、わずかである。

未婚の女性首長の「未婚」は夫や子がいなかったことを意味するとはかぎらない。彼女たちの大半は一般女性とおなじように夫や子と家庭生活を営む。ただし、結婚は婿入婚¹⁾でおこなわなければならない。

適切な質と量の金の装身具や家畜(水牛、馬、豚)からなる結納(婚資)が支払われると、女性は所属する父系集団から婚出する。リオ語にはこのことを明確に表現する一連の語彙や禁忌がある。婚出することはワウ wa'u (出る)、婚出した女性は「(外に) 出た子」(ana wa'u) になる。そのため、婚出女性が出身父系集団の祖先祭祀にかかわることは禁忌(piré)になる。他方、婿入婚をおこなう女性首長は自分の所属する父系集団から婚出しない。その結果、子どもたちは女性首長とおなじ父系集団の成員になる。

そうであるなら、女性首長は「未婚」ではなく、婿入婚をおこなった既婚女性ではないのか。筆者はこの解釈をとらないが、その理由のひとつはつぎのことにある。婿入婚は、婚入者が男性である点で、婚入者が女性である嫁入婚と区別される結婚のひとつの方式として理解されがちだが、ここでいう婿入婚はそうではない。それは、女性首長がおこない、上位世代の系譜に現れる一後述するモレ Mole のような一特別な女性がおこなった婚姻なのである。次節では女性首長の婿入婚が遠方の首長国出身の男や素性の明らかでない男と選択的におこなわれていた事例についてのべる。

第 2 の理由はリセ首長国の女性首長(ハゴワウォ hago wawo) の存在である。少なくとも 2 代目まで、ハゴワウォは、耕作年度を更新するポオ po'o という儀礼につづく物忌みの期間に空間分類上は屋外であるベランダで不特定多数の男と交わって後継者となる娘をえており、夫といえるようなパートナーはいなかったとされる。婿入婚に相当するリオ語の表現は、女性首長のいる首長国が密集するレペムブス山(Keli Lepembusu, エンデ県最高峰であり、標高 1,745 m) 周辺の西 K 方言域では知られているが,²⁾ リセ首長国では知られていない(図 1 参

1) ここでの婿入婚は日本民俗学の用語では婿取婚あるいは招婿婚と表現すべきである。民俗学でいう婿入婚は、嫁家での婚姻儀礼の後、一定期間、婿の妻間いがおこなわれ、やがて夫婦そろって婿家に引き移る一連の過程をふくむ婚姻のことをいう[八木 2001: 22]。このような意味で婿入婚を用いると、中部フローレスにおける嫁入婚は婿入婚である。

2) 西 K 方言域で婿入婚は「頭を持ち上げ、足を担ぐ」(poto kolo, rénggi gha'i) と表現される。ただし、第 3 節に登場する P 氏によると、これは婚家の視点からの表現であり、婿入りする男性の視点からは「幹を腕で抱き、朽ちた木を胸に抱く」(gao lo, kaka fata) になるという。

照).³⁾ これはハゴワウォに夫がいなかったことと関連づけて理解すべきかもしれない。現在のハゴワウォは、ポオの物忌み期間中、カトリック婚をおこなった夫とともにベランダで寝る。にもかかわらず、ポオの物忌み期間中のハゴワウォは不特定多数の男性によって性的にアクセス可能であるように語られる。

第3の理由はつぎのことにある。女性首長のいる首長国はリオ語域にある首長国の2割程度である。また、その分布もレプムプス山周辺の首長国に集中している。そうであるなら、この2割を例外として扱うべきだろうか、それとも、女性首長のいる首長国とない首長国との連続性を比較によって明らかにすべきだろうか。筆者は杉島[2017]で後者の可能性を探索した。女性首長とその兄弟が首長国の因果根と不可分な関係にあることに着目するなら、結婚によって分離されなかった兄弟姉妹が女性首長のいない首長国における因果根になっている多様な事例が見つかるからである。以下では、前稿でのべたこれらにかかわる事例を概観する。

①ンドリ首長国 (Tana Ndori)：海の彼方から兄のミリ Miri, 弟のバリ Bari, 姉妹のモレ Mole がやってきて、無主地だったフローレス島に住み着いた。かつてンドリ首長国の領地はフローレス島の全体だった。ミリとバリが誰と結婚したのかは不明だが、モレは海の向こうからやってきた名前や出身地の知られていない外国人の男と夫婦になった。この外国人は首長になった。そのために悪口をいわれて帰国しようとしたが、縛りつけられ、帰されなかった。ミリ、バリ、モレの後継者である首長は現在でもンドリ首長国の因果根でありつづけており、首長国民のために豊穡儀礼をおこなう。口頭伝承で語られることだが、先住者（の首長）を首長国から追い払うと凶作がおこるとされる。また、殺されて切り刻まれた身体が稲をはじめとするすべての作物の種となったという、一般名で「稲の母」(iné paré) とよばれる女性はモレの子孫とされる。

以下では、伝承の内容はともあれ、無主地に最初に住み着いた者の子孫を「先住者」と総称する。中部フローレスの人びとは、近年こうした先住者をインドネシア語のオラン・アスリ orang asli (先住民, indigenous peoples) という言葉で総称するようになった。本稿における「先住者」というカテゴリー化はこれにしたがっている。

②ムブリ首長国 (Tana Mbuli)：ムブリ首長国はンドリ首長国と隣接しているだけでなく、言語的にも歴史的にも共通点が多い。ムブリ首長国の先住者の祖先は海の彼方から無主地だったフローレスにやってきて住み着いた兄弟姉妹（兄弟3人、姉妹3人）であり、彼らは兄弟と姉妹が3組の夫婦になって子孫をえたとされる。

③ブー首長国 (Tana Bu)：4人の兄弟と1人の姉妹(Q)がおり、彼らの子孫はブー首長国に5人いる先住者の首長になっている。Qの夫だった男の名前や身元は知られていない。先

3) リオ語表現がない場合、インドネシア語のカウィン・マスック kawin masuk (結婚する・入る) というイデオムが使われる。この表現はインドネシアの地方ごとにさまざまな意味で使われている。

住者の首長たちは、年 1 回、Q の子孫である首長の住む祭祀家屋に集まって豊穡儀礼をおこなう。

④ブー首長国：③にはつぎのような異譚がある。4 人の兄弟と 3 人の姉妹がいた。2 人の姉妹は近隣村の有力者に嫁いだ。しかし、残る 1 人の姉妹（Q）が兄弟の 1 人と近親相姦を犯した。③の Q はこのインセストを犯した Q と同一人物である。

⑤ブー首長国：大洪水がおり世界を破滅させた。それを生きのびたのは 1 組の兄弟姉妹だけだった。彼らは性的に交わり、子をえた。あらゆる作物の種となった「稲の母」は彼らの曾孫である。

以上のように、各首長国の政体の中心をめぐる語りには結婚によって分離されない兄弟姉妹がふくまれている。こうした兄弟姉妹を「原初対」と総称する（図 2 参照）。そのうち①と③では姉妹に婿をむかえ、②、④、⑤では兄弟姉妹が夫婦になるか、性関係をもった。前者を「婿入婚型」、後者を「近親婚型」とよんで区別する。

婿入婚型と近親婚型は相互転換的である。①と②はそれぞれンドリ首長国とその西側に隣接するムブリ首長国で聞かれる口頭伝承であり、内容的にも似ている。また両首長国のあいだには古くから交流があり、言語的にも歴史的にも共通するものが多い。だが、①の原初対は婿入婚型であるのに対し、②は近親婚型である。同様のことは③と④についてもいえる。③と④はブー首長国のそれぞれ別の識者から聞いた伝承だが、おなじ兄弟姉妹のセットが③では婿入婚型、④では近親婚型になっている。



図 2 原初対の分類

坪内と前田は、マレー半島に住むマレー人の新婚夫婦間の呼称について、つぎのようにのべている。

結婚初期においてはお互いにキョウダイ名称であるアバン abang（兄）とアデック adek（年下のキョウダイ）を用いることが多い。…ここで注意すべきは、夫婦が兄妹と同視されるのではないということである。性的関係という面で両者は根本的に対立する。一方は性的関係を結ばねばならぬし、他方は厳に禁止されている。なぜ夫婦関係の中に、性的関係を禁忌する名称が持ち込まれうるかという疑問に答える言語学的な材料はない。ここでは、これは新夫婦が新しい家族を兄妹単位を基として作りかけているという象徴的な表現であるとともに、両者とも両方の親の家族の一部になったのであるという暗示と解釈したい [坪内・前田 1977: 38-39]。

坪内と前田の調査村ではマレー語が話されている。いうまでもなくマレー語はインドネシア語同様、オーストロネシア語族の主要言語のひとつである。

上の引用文で坪内と前田は婚後まもない夫婦間のマレー語の呼称を説明づけようとしているが、徒勞というべきだろう。リオ語域において交際の男女は互いを兄弟（nara）／姉妹（weta）とよびあう。また、こうした呼称を歌詞に織り込んだリオ語ポップスもよく耳にする。しかし、子どもが生まれ、父母になった男女は兄弟／姉妹とはよびあわなくなる。これらは一致してつぎのことを示している。すなわち、夫婦になる可能性のある男女の基本的イメージは見知らぬ男女ではなく、兄弟姉妹なのである。後ほど、天地が分離する以前の始原の世界を生きていた男女が性的に交わり、子孫をえる神話に何度も言及するが、たとえ兄弟姉妹と明言されない場合でも、本稿では彼らを兄弟姉妹として扱う。その理由は夫婦に発展する可能性のある男女が兄弟姉妹として関係をはじめることにある。ただし、兄弟姉妹のインセストは原初対を構成する男女にのみ認められることであり、通常の間が関係しあう親族の位相ではタブーであることはいうまでもない。

婿入婚型は、原初対から派生する子孫の組成に着目すると、2つのサブタイプに区分される。上の①や③では姉妹が婚出しなかったことの当然の結果として、婿入りした男の子孫は妻方に吸収されている。これを「未分型」とよぶ。だが、つぎの⑥のように、婿入りした外来の男の子孫が妻方に吸収されず、先住者とは別個の集団を形成している場合がある。これが「分岐型」である。

⑥リセゲトゥ首長国（Tana Lise Detu）：ムブリ首長国の男、ラシ Rasi は、その北東に隣接する土地の先住者であるジュケ氏族の女、ベナ Bhena と夫婦になった。その際、結納としてこの世に存在しない魚を求められた。それを見つけられなかったために、ラシは婿入りし、

ジュケ氏族の領地に住むことになった。ムブリ首長国に住むラシの兄たちの父系子孫によると、ラシは他国に「出稼ぎにいった」(merantau) ことになっており、系譜はラシで途絶え、ラシの父系子孫は彼らとは無関係な他人とみなされていた。

ラシの子孫は先住者集団のジュケ氏族とは明確に区別されるラシ氏族 (Embu Rasi) を形成している。ラシ氏族側の語りでは、リセデトゥ首長国はラシの婿入りによって成立したとされ、ジュケ氏族の代表者は「母父首長」(mosa laki iné amé), ラシ氏族の代表者は「根幹首長」(mosa laki pu'u) とよばれる。この体制を分岐型とよぶ理由は、「母父」(iné amé) と「根幹」(pu'u) がともに因果根に言及する表現であり、両首長はともに因果根にかかわる首長であることが含意されているからである。

⑦リセ首長国 (Tana Lise あるいは Lise Tana Telu) : リセ首長国における「母父首長」と「根幹首長」の関係は、その成立にかかわる物語こそ⑥とは異なるが、構成原理的にはリセデトゥ首長国における母父首長と根幹首長との関係と同じである。同様の関係はングラ Nggela 首長国やウォロジタ Wolojita 首長国における母父首長と根幹首長についてもいえる。ただし、つぎのべるように、ひとつの首長国には原初対が複数存在する場合がある。

⑧リセ首長国 : ⑦でのべた母父首長と根幹首長との関係とともに、リセ首長国では先述のハゴワウォとその兄弟である「長大首長」(ria béwa) からなる原初対も作用している。長大首長と根幹首長のどちらが高位であるかをめぐる議論がリセ首長国ではしばしばおこなわれ、おさまる気配がない。これらのことは、ひとつの首長国に複数の原初対が作用している場合、そこには首長同士が因果根をめぐる政治状況のあることを示唆している。

⑨西 K 方言域内のウォロガイ首長国 (Tana Wologai) には 6 つの「家」(sa'o) があり、そのそれぞれに女性首長がいる [青木 2005: 137-144]。この場合の家とは首長国内に地縁化し、統合の象徴である「祭祀家屋」(sa'o) をもつ親族集団である。本稿ではこうした親族集団を父系出自集団とは区別しない。適切な額の婚資が支払われることで、女性は先述のような意味で「婚出」し、その子は父方に帰属するようになるからである。前稿では、ウォロガイ首長国の各家に女性首長がいることについて、上の⑧におけるのと同様の解釈、すなわち因果根であることを求めて家同士がせめぎあっている状況のある可能性を指摘した [杉島 2017: 152]。

前稿では以上のような議論の後、西 K 方言域内のペイベンガ Pe'ibenga 首長国、ウォロオジャ首長国 (Tana Wolooja), デトゥンガリ首長国 (Tana Detunggali) からの断片的な調査資料にもとづき、婿入婚型が未分型と分岐型に区分されるように、近親婚型にも同様の 2 つのサブタイプがある可能性を推測的にのべた。

本節では首長国の存在を前提に論を進めてきたが、先述のように、リオ語地域に存在する首長国の数を知ることは難しい。その原因のひとつは、首長国の範囲をめぐる異なる主張や見解が錯綜し、どのような範囲の政治社会を首長国とみなしていいものか判断のつきかねること

が少なくないことにある。こうした事例に直面したとき、調査を進めるうえでの指針として有効だったのは、原初対に焦点をあわせ、原初対を中心に営まれている政治社会の来歴や動向に注目することだった。そうすることで、首長国に伏在する分離主義や特定の首長間に間歇する反目などを理解できるようになることも一再ならずあった。本稿における原初対と政体の概念は、このような調査経験に由来する。

ここであらためて定式化しておく、両者はつぎのように関係している。すなわち、政体の概念は「原初対を中心に営まれている政治社会の存在が認められる」ことを内包とし、政治社会を構成する要素を斟酌していない。したがって、本稿で政体とよぶ政治社会の組織形態に筆者は何も限定をもうけていないのである。⁴⁾

2. デトゥンガリ首長国

筆者は1997年1月7日に西K方言域にあるデトゥンガリ首長国の中心村、レヴムバンガ Lewu Mbanga で根幹首長のM氏(1934–2017年)に数時間のインタビューをおこなったことがある。インドネシア政府がデトゥンガリ首長国で実施していた土地政策の実情を知ることが主な目的だったが、その際、デトゥンガリ首長国にはM氏をふくめ7人の首長がいることや、そのうちの1人が女性であることを知った。このときの調査資料は前稿で用いた。

その19年後、中部フローレスの広域調査をはじめた筆者は、2016年7月28日にM氏をレヴムバンガ村にたずねた。しかし、M氏は、体調をくずし、エンデ市に住む次男Y氏の家から通院しているとのことだった。いったんエンデ市にひきあげ、翌日の夕方、Y氏宅をたずね、M氏に再会した。握手した手に力がなく、少し熱があった。以下はこのインタビューで聞いた話である。

デトゥンガリ首長国の全体は、誰も住んでいない無人の土地に自分の祖先がレペムブス山から下りてきて最初に住み着いた土地(tana nggoro)であり、戦争によって奪った土地(tana wika)は1片もない。自分をふくめデトゥンガリ首長国にいる7人の首長は全員がアナAnaとカロKaloの子孫である。

M氏はアナとカロについてつぎのように語った。アナAnaとカロKaloは最初の人間であり、彼らはレペムブス山の頂に住んでいた。当時、天と地は近く、海面はレペムブス山の頂近くにあった。モダマ(koba léké)が天と地を結んでおり、夜になると、それをつたって豚が天から降りてきて作物を食い荒らした。これを知ったカロは、豚が作物を食い荒らした後、モダマをつたって天に登っていくと、再び地上に降りてこられないようにモダマを切った。すると、天が遠のき、海が下がっていった。そして天と地は現在のようになった。その後、アナと

4) 本稿では注で記すにとどめるが、榎村は南北朝時代に斎王制が消滅していく過程を、政治社会の組織の変容というよりは、歴史的偶発性として論じている[榎村1996:137–181]。

カロはバッタ (ko'a) の交尾をまねて性的に交わり、子をえた。

M 氏は、アナとカロを兄弟姉妹であるとは明言しなかった。彼らの子孫について質問すると、M 氏はつぎのように語った。

アナとカロの息子はレタ・カロ Leta Kalo, その息子はランバ Lamba, その息子はスンドゥ Sundu…〔ここで M 氏は語りを中断し〕今はノートが手元にないので、スンドゥ以下の祖先の名前は語れないが、自分はアナとカロの 33 代目の子孫である (図 3 参照)。

レタ・カロという名前にはつぎのような含意がある。息子の場合でも、娘の場合でも、個人名には、しばしば父の名前が後置される。それゆえ、カロは男 (父) であり、アナは女 (母) だったことになる。また、アナとカロは、アナカロ ana kalo のように熟語として使われると、「孤児」を意味する。識者たちはこの名前の含意をよく認識しており、アナとカロの親や祖先について語るリオ人は極めてまれか皆無である。

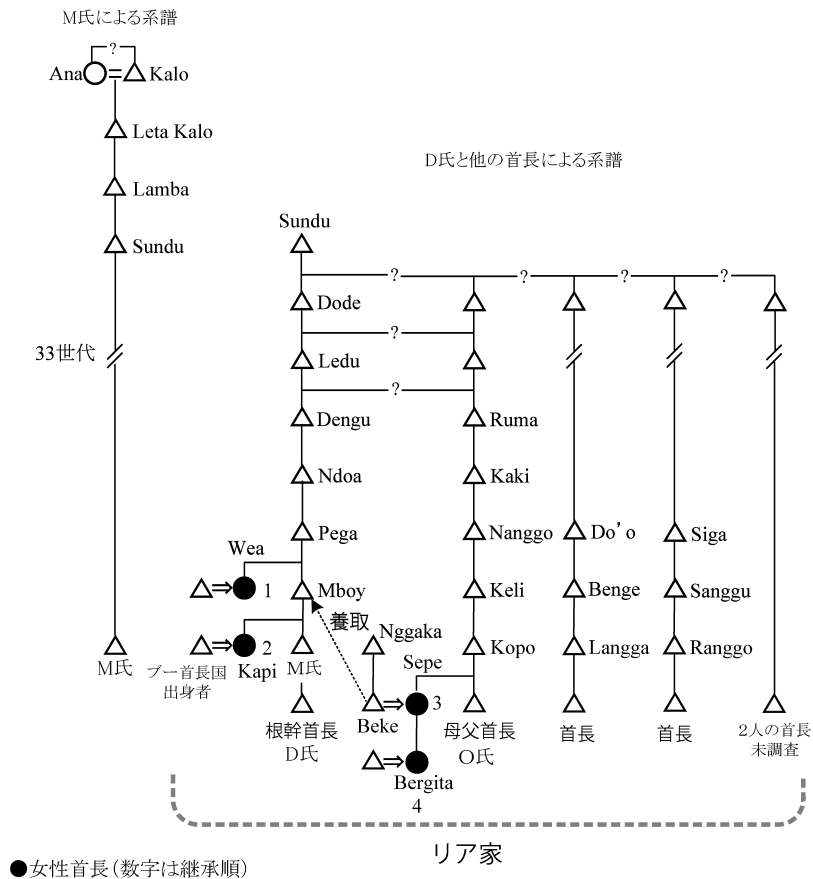


図 3 デトゥンガリ首長国の女性首長関連系譜

筆者は、アナとカロからデトゥンガリ首長国の7人の首長にいたる系譜を知りたいと思っていた。1997年のインタビューの際、M氏は、デトゥンガリ首長国にいる7人の首長のうち、母父首長と根幹首長が、それぞれ与妻者（wife-giver）と受妻者（wife-taker）として母方交叉イトコ婚をおこなっているかのようにいいながら、その具体例を語らなかったか、語れなかった。

2016年7月29日の夕方、M氏の話聞きながら、筆者はつぎのように考えていた。デトゥンガリ首長国の7人の首長全員がアナとカロの子孫であるなら、彼らはアナとカロから現在にいたる33世代のあいだに7つの系統に分化していったはずである。その詳細を知ることができれば、母父首長と根幹首長との関係だけでなく、女性首長が代々どのように継承されてきたかについても知ることができるだろう。

だが筆者はM氏へのインタビューを15分ほどで切り上げた。質問を重ねても、ノートが手元にない以上、体調の悪いM氏を苦しめるだけである。それよりも、M氏の回復と帰村をまってインタビューをおこなうべきだと思ったのである。しかし筆者の帰国後、M氏は回復することなく、翌年の1月に亡くなった。

2017年7月22日、M氏への墓参り、M氏の後継者として近いうちに根幹首長に就任するM氏の長男D氏に挨拶するために、Y氏とともにレヴムバンガ村を訪問した。その際、アナとカロから現在にいたる系譜についてD氏にたずねた。D氏は、自分がアナとカロの子孫であることはよく知っていたが、系譜はスンドゥ Sundu から自分到现在にいたる8世代分しか知らなかった。

D氏によると、M氏は金色のインクで書かれた本（buku tinta emas）をもっており、そこにはアナとカロから現在にいたるすべての歴史が記されているという。それはM氏が夢のなかで読んでいた本の話かと筆者がたずねると、本は実在のものであり、M氏の死後、本を見つめようと、さんざん探しまわったが、まだ見つかっていないとのことだった。

M氏が語ったスンドゥとD氏が語ったスンドゥは同一人物ではないだろう。もし同じなら、アナとカロからM氏にいたる系譜は11世代しかないことになるが、M氏は33世代あるといていた。また、デトゥンガリ首長国の南に隣接するウォロムク首長国のP氏（次節参照）は、後ほど図4に示すように、スンドゥからM氏にいたる系譜を知っており、詳しく調べたことはないが、スンドゥから上の世代には多くの祖先がいるだろうといていた。

D氏には、母父首長と根幹首長がそのようによばれるようになった経緯についてたずねた。D氏が黙っているのだから、今度は母父首長と根幹首長が母方交叉イトコ婚をおこなっているのかどうかをたずねたが、この質問にも反応がなかった。そこで筆者は、母父首長と根幹首長は、祖先が同じであることのほかに、どのような関係にあるかについてたずねた。D氏が話してくれたのは、セペ Sepe という名の女性首長への婿入りに関するものだった。この結婚をふくめ、つぎにデトゥンガリ首長国における女性首長の役割と、その継承について述べる。

杉島 [2017] では、デトゥンガリ首長国における女性首長の地位名を「地の神への供物を料理する首長」(mosa laki séré aré tana nasu uta watu) と書いた。これはまちがいでなかったが、D 氏たちのリオ語による会話を聞いていると、女性首長はプーマル pu maru とよばれていた。プーマルという言葉の意味については次節でのべる。

女性首長は、根幹首長が豊穡儀礼をおこなう畑 (uma ria) にまく種とそれを保管しておく穀倉を管理している。また、根幹首長とともに豊穡儀礼をおこない、その際、地の神 (tana watu) に供える食物を料理する。女性首長が遵守しなければならないタブーについてたずねたが、次節でのべるウォロムク首長国におけるような禁忌はないとのことだった。

女性首長には根幹首長の未婚の姉妹が就任することが原則である。ただし、D 氏と D 氏へのインタビューの際に同席していた母父首長の O 氏 (図 3 参照) が記憶する 4 人の女性首長の継承はそう単純なものではなかった。

D 氏の記憶する最も古い女性首長はウェア Wea だが、ウェアに婿入りした男の名前と出身地は記憶されていなかった。ウェアのつぎに女性首長になったのはカピ Kapi だった。カピに婿入りしたのは、遠く離れたプー首長国 (図 1 参照) の男 X だった。X がプー首長国からやってきた 1960 年代末から 1970 年代初頭、中部フローレスにおける主な移動手段は徒歩だった。これにくわえ、外来者に対する恐怖まじりの強い不信感をもつ多くの首長国を通りぬける困難を考えると、プー首長国の男の婿入りは国際婚のようなものだったといえるだろう。X がデトゥンガリ首長国にやってきたきっかけは伝えられていなかったが、リカムボコテル首長国 (Tana Lika Mboko Telu, 図 1 参照) では 1964 年にリセ首長国南部の 2 つの行政村から 250 名の水田開拓移民を受け入れたというから、こうした移住の波に乗ってカピの夫はデトゥンガリ首長国にやってきたのかもしれない。

カピは 1977 年、祭祀家屋で女性首長として料理をしている最中に意識不明になり、急死した。その跡を継いで女性首長に就任したのはセペ Sepe だった。セペの結婚についての説明はつぎのようだった。出身地も素性も不詳のンガカ Nggaka という男がいた。ンガカには借金があり、その借金を根幹首長のムボイ Mboy が返済してやった。そのかわり、ムボイはンガカの息子のベケ Beke を養取した (ghawé)。このベケがセペに婿入りしたのである。ベケとセペのあいだに生まれたのが現在の女性首長のベルギタ Bergita であり、彼女にも遠方のサガ首長国出身の男が婿入りした (図 1 参照)。

以上のような伝承は、D 氏や O 氏をはじめとする首長国の偉方たちが確信をもって強調していた、女性首長は「一度も婚出したことがない」(iwa pernah wa'u) という説明と一致する。

女性首長の候補者の範囲は男性首長との親族関係によって決まるが、女性首長の最終的な選出は、アウ au とよばれる硬い竹を火にかざして、割れ目がまっすぐに通るかどうかで、候補者の誰が適格かを占う「竹卜」(so bhoka au) によっておこなわれる。

デトゥンガリ首長国における母父首長と根幹首長をはじめとする7人の首長の全員はアナとカロの子孫とされる。また、西K方言域の大半の首長国には複数の「家」があるのとは対照的に、デトゥンガリ首長国にはリア家 (Sa'o Ria) というひとつの家があるだけであり、7人の首長は全員がリア家の成員である。そうであるなら、デトゥンガリ首長国における原初対は近親婚型といえるが、近親婚型の場合にも未分型と分岐型というサブタイプを定立できるかどうかを考えてみよう。

ウェアとカピは根幹首長の姉妹だが、彼女たちに婿入りした男の子孫は根幹首長のラインから独立しておらず、そこに埋没している。したがって、カピまでは未分型だったといえるだろう。だが、セペは母父首長の姉妹であり、それに婿入りしたのは外国のような遠方の首長国出身の男ではなく、根幹首長の養子のベケだった。そのため、セペとベケとの結婚は、母父首長のラインと根幹首長のラインの区別や、後者から前者への婿入りなどの語りを生み出す。その

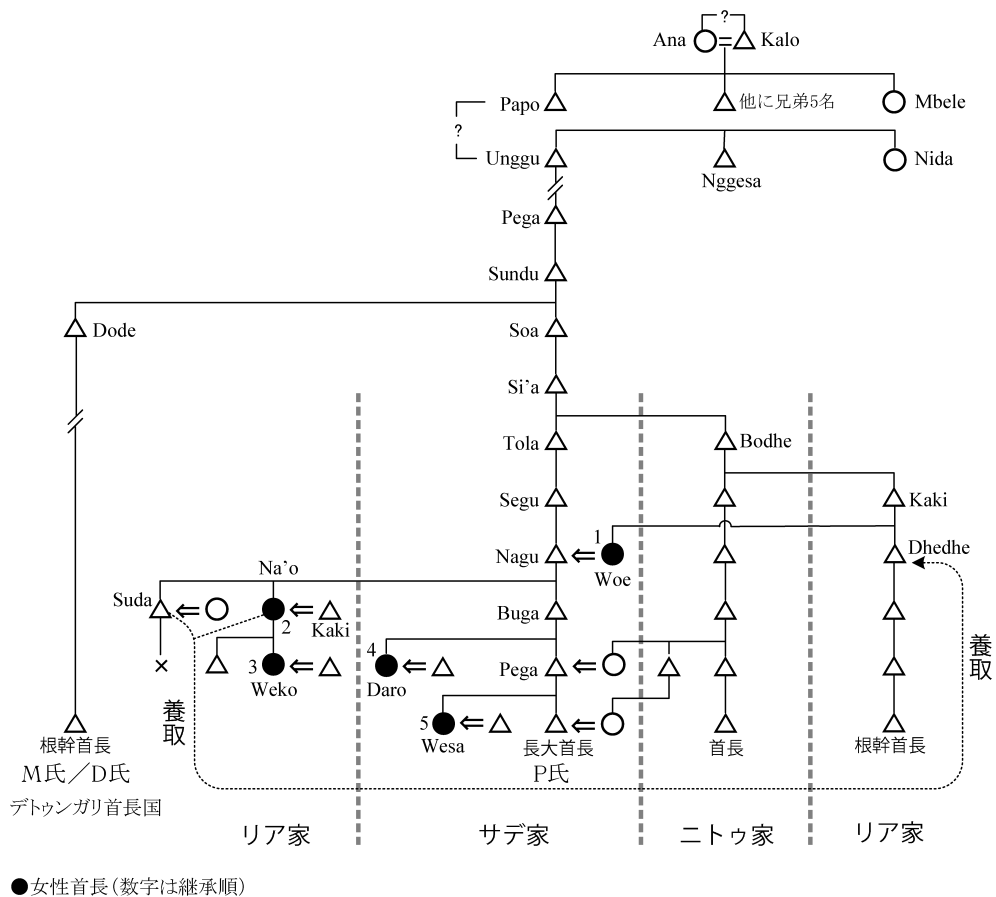


図4 ウォロムク首長国の女性首長関連系譜

結果、前節の⑥と⑦でのべた婿入婚型のサブタイプのひとつである分岐型とおなじような体制が生じるし、1997 年の M 氏の語りにあるように、実際にそうなったと思われる。ことによると、母父首長のラインと根幹首長のラインの区別は、リオ語域の南部で広く使われている母父首長と根幹首長という名称の借用をふくめ、セベとベケの結婚とともに導入されたのかもしれないが、D 氏や O 氏はその経緯の詳細を知らなかった。

以上のことから、近親婚型の場合にもそのサブタイプとして未分型と分岐型を措定することは可能であり、そうすることは記述のためにも有用と思われる。

3. ウォロムク首長国

エンデ県庁につとめる友人から、彼の同僚であるウォロムク首長国 (Tana Wolomuku) 出身の P 氏を紹介してもらい、2017 年 7 月にエンデ市の P 氏宅でインタビューをおこなった。2018 年には P 氏とともにウォロムク首長国とその周辺の村々を訪問し、短時間のインタビュー調査をおこなった。P 氏は高学歴者であることにくわえ、老人たちの語る歴史や慣習法の話子どものころから好んで聞いていたというだけあって、知識が広範で、説明が精緻だった。

ウォロムク首長国の中心村はウォロムクである。現在ウォロムクは人びとが常住する村になっているが、かつては大きな儀礼のあるときにのみ人びとが集まる儀礼村であり、1970 年代まで人びとは畑近くの出作り小屋に住んでいた。同様なことは、前節でのべたデトゥンガリ首長国のレヴムバンガ村についてもいえる。

ウォロムク村の中央にある石積みの円形広場の周辺には、4 つの祭祀家屋が建てられている。それぞれの祭祀家屋は、それとおなじ名前の親族集団としての家が儀礼をおこなう場になっている。それぞれの祭祀家屋＝家の名前と、その長が就任する役職名を以下に記す。

リア家 (Sa'o Ria) : 根幹首長 (mosa laki pu'u) と女性首長 (pu maru)

サデ家 (Sa'o Sathé) : 長大首長 (ria béwa)

ニトゥ家 (Sa'o Nitu) : 首長 (mosa laki)

ビスコジャ家 (Sa'o Bhisu Koja) : 首長 (mosa laki)

リア家、サデ家、ニトゥ家は共通の祖先に由来する。ペガ Pega の上位世代の祖先について詳しく調べたことはないが、ウング Unggu (図 4 参照) にいたるまでには多くの世代があると思うと、P 氏はのべていた。

最上位の祖先はアナ Ana とカロ Kalo という名前の男女である。彼らは兄弟姉妹だったともいわれるが、よくわからない。アナとカロはレペムブス山の頂に住んでいた。アナとカロは夫

婦になり、子をえた。当時の海面はレペムブス山の頂近くにあり、天と地は近接していた。夜になると何ものかが畑の作物を食い荒らすので、カロが夜番をしていると、ベンガルボダイジュ (lélé) に絡みついて天に達しているモダマをつたって豚が降りてきて、作物を食い荒らした。

そこでカロは豚が天に上っていくと、再び下りてこられないようにモダマを切った。すると天が遠のき、海が下がっていった。そして、天上の豚はワウォトロ Wawo Toro という星 (アンタレス) になった。⁵⁾

アナとカロの子 (孫) であるパポ Papo を長兄とする6人の兄弟と1人の姉妹 (ムベレ Mbele) が舟に乗ってレペムブス山を下り、中部フローレスの各地に移住していった。このことは「アウ竹の帆柱とともに下り、船板とともに降る」(wa'u no'o mangu au, nggoro no'o fi'i jo) と表現される。

重要なので、この点についてつぎの情報を補足しておきたい。ウォロムク首長国にかぎらず、リオ語域の全体にいえることだが、山の頂からであれ、海の彼方からであれ、先住者が無主地に定着することは「アウ竹の帆柱とともに下り、船板とともに降る」と表現される。

パポは〔次節でのべるウング首長国の〕カンガナラ Kanga Nara 村に到着した。したがって、カンガナラ村は、レペムブス山から下りてきた先住者の中心地である。しかし、P氏はパポと先述のウングとの関係の詳細が把握できておらず、両者をおなじようにも、別のようにも語っていた。

P氏は、ムブーMbu という名の女性 (一般名でいうと先述の「稲の母」) が自分の身体を作物の種にするために兄弟のンダレ Ndale に自分を殺させた作物の起源神話も知っていたが、この兄弟姉妹が上の系譜とどのように関係するかの詳細は知らなかった。

〔図4中の〕トラ Tola とボデ Bodhe はカンガナラ村からウォロムク周辺の地域を統治する権限を与えられ、この地にやってきた。彼らはリア家、サデ家、ニトゥ家の祖先である。他方、ビスコジャ家の由来はつぎのようである。トラとボデの時代、ウォロガイ首長国出身のンドポ・サンゴ Ndopo Sanggo の協力をえて、現在ウォロムク首長国の領地の一部をなす土地をフローレス西端出身のバジョ (Bajo, Wajo) 人のモダ・ラジャ Moda Raja から奪い取った。この功績のために、ンドポ・サンゴは首長としてウォロムク村にとどまり、ビスコジャ家を創設した。

根幹首長の姉妹が女性首長に就任するが、この地位の継承はサデ家との緊密な連携のもとにおこなわれている。以下はウォロムク首長国の女性首長に関するP氏の説明である。

ウォロムク首長国には女性首長が1人いる。女性首長はプーマル pu maru とよばれる。プーには「以前から受け継がれてきたもの」(warisan lama) と、開墾されたことのない森という

5) アンタレスについては、これとまったく異なる神話も知られている [杉島 2017: 140-141]。

意味がある。マルは高速で自転する地球の地軸のような不動の状態を意味する。ウォロムクでも、「地の神への供物を料理する首長」(mosa laki séré aré tana nasu uta watu) という女性首長の地位名は知られているが、普通はプーマルとよばれる。

女性首長はつぎのような禁忌をまもる。女性首長は新米を食べてはならないので、常に古米を食べる。また、ベテル・チューイングのために生のビンロウジやキンマの実を噛むことがタブーなので、ビンロウジの種核を輪切りにして乾燥させたもの (déka) とキンマの葉で代用しなければならない。女性首長がこうした禁忌をまもらないと、作物のできが悪くなったり、家畜が繁殖しなかったり、首長国民が病気になったりする (tedo iwa tembu, wésa iwa wela; peni iwa ngé, wesi iwa nua; tebo iwa ji'é, lo iwa pawé)。

根幹首長になるのはリア家の男であり、かつてはその姉妹が女性首長に就任していたと思う。だが、4 世代前に女性首長のウォエ Woe がリア家から婚出し、サデ家のナグ Nagu に嫁いだ。そのために、ナグとウォエのあいだに生まれた 3 人の子のうち、スダ Suda とナオ Na'o をウォエの兄弟のデデ Dhedhe が養取した (ghawé)。

万が一、女性首長が婚出すると、生まれた子のうち「1 組の兄弟姉妹」(sa weta sa nara) を女性首長の兄弟が養取する。しかし、それは 1 世代だけの処置ではなかった。ウォエにつづいて女性首長に就任したのは、娘のナオ Na'o であり、ナオにはカキ Kaki が婿入りした。カキが何者か P 氏は知らなかった。つぎの世代ではナオの娘のウェコ Weko が女性首長に就任した。つぎに女性首長に就任したダロ Daro は、養取されることなくサデ家に残ったウォエの息子、プガ Buga の娘であり、ダロにつづいて女性首長に就任したウェサ Wesa もサデ家の者だった。

これらは、ウォエがリア家から婚出し (wa'u), サデ家に婚入したことによる。たとえリア家に女性首長に就任可能な女がいても、サデ家が女性首長を充当しなければならない。なぜこのようなことをおこなわなければならないのか、つい考えてしまうことがあると、P 氏はいつていた。

デトゥンガリ首長国と同じく、アナとカロを首長たちの祖先としている点で、ウォロムク首長国の原初対は近親婚型である。だが、婚出してはならない女性首長 (ウォエ) がリア家を出て、サデ家に婚入したために、現在にいたるまでサデ家はリア家から女性首長の後継者を求められつづけている。この状態は、サデ家とリア家が別個の家を構成している点で未分型ではないが、分岐型でもない。分岐型なら、サデ家の男がリア家に婿入りしていなければならないからである。そうであるなら、近親婚型のなかに第 3 のサブタイプをもうける必要があるだろう。リア家がサデ家の女性成員をリア家の女性成員のように扱っていることから、このサブタイプを「併合型」と名付ける。現在までのところウォロムク首長国以外で併合型の類例は確認できていない。

4. ウング首長国

女性首長のいる首長国として前稿と本稿で6つの首長国（リセ、ウォロガイ、デトゥンガリ、ウォロムク、ペツイベンガ、ウォロオジャ）をとりあげたことになる。これ以外に女性首長のいる首長国が少なくとも2つあることを筆者は知っているが、それらを列挙することで、女性首長のいる首長国の数を確定することに筆者は懐疑的である。つぎにのべる女装する男性のプーマルの事例はこのことを示している。

2016年8月8日～10日と2019年9月3日にウング首長国（Tana Unggu）のカンガナラ Kanga Nara 村の出身で退職公務員のA氏にエンデ市の自宅でインタビューをおこなった。A氏は、長年エンデ市で働き、暮らしてきたが、ウング首長国について多くのことを知っている。エンデ県庁につとめる友人が紹介してくれたのである。

A氏によるとウング首長国の発端はつぎのようである。レペムブス山に1組の兄弟姉妹が住んでいた〔A氏はこの兄弟姉妹の名を決して口にしなかった〕。彼らのあいだに3人の子が生まれた。兄のウング Unggu、弟のングサ Nggesa、姉妹のニダ Nida である。彼らはレペムブス山からウォロウイア Wolo Wi'a を経て、ヌアウング Nua Unggu に下りてきた。そこでしばらく暮らした後、ウングはカンガナラ村に、ングサはングサ村に、ニダはニダ村に移り住んだ。現在ではこれらの村はそれぞれウング首長国、ングサ首長国（Tana Nggesa）、ニダ首長国（Tana Nida）の中心村となっている。この3つの首長国内には戦争で奪った土地は一片もない。

レペムブス山を南限とし、リセ首長国とリカムボコテル首長国（Tana Lika Mboko Telu）とのあいだに挟まれた地域には（図1参照）、第2節と第3節でとりあげたデトゥンガリ首長国やウォロムク首長国をふくめ、首長国が15ほどある。これらの首長国⁶⁾の創始者はウングの子孫である。そのために、ウング首長国はこれらの首長国にとって起源の地であり、このことを認識する首長国がウング首長国を中心にゆるい結びつきを保っている。この結びつきにおいて重要であるのは儀礼社（keda）である。カンガナラ村中央の石積みの円形広場には神像（ana déo）の置かれた儀礼社が建てられているが、この儀礼社はウング起源の首長国群にあるすべての「儀礼社の根幹」（keda pu'u）とされる。

ウング首長国に7人いる首長の地位名、所属する家＝祭祀家屋の名称は以下のとおりである。祭祀家屋は石積みの円形広場をとりまくように建てられている。

ンドンド家（Sa'o Ndondo）：根幹首長（mosa laki pu'u）と長大首長（mosa laki ria béwa）

6) ただし、ウォロトボ Wolo Topo 首長国のように、中部フローレスの南岸にありながら、祖先がウング首長国からやってきたという伝承をもつ首長国もある。

ムバリ家 (Sa'o Mbari) : 根幹首長 (mosa laki pu'u)

ソア家 (Sa'o Soa) : 長大首長 (mosa laki ria béwa) と首長 (mosa laki)

ピンガバー家 (Sa'o Pingga Bha) : 皿器の母父首長 (mosa laki iné pingga amé bha)

マタウォロ家 (Sa'o Mata Wolo) : 首長 (mosa laki)

これらの家々はすべてウングに由来し、外来者の家はないという話は P 氏をふくめ、何人ものウング首長国出身者から聞いた。

世代は不明だが、ウングの子孫であるカキ Kaki という男には 3 人の子がいた。兄のムバリ Mbari、弟のンドンド Ndondo、それに名前の不明な姉妹 (Z) である。ムバリはムバリ家、ンドンドはンドンド家の始祖となった。また姉妹 (Z) には身元不詳のガディ Gadi という男が婿入りし、ンドンド家の長大首長の祖先となった。

ウング首長国の上記のような家々の相互関係について筆者は多くを知らない。だが、上の兄弟姉妹の関係がその中核をなしていることが推測される。2 人の兄弟と 1 人の姉妹からなる兄弟姉妹は、先にのべたウング、ングサ、ニダという 3 つの首長国間の相互関係だけでなく、第 1 節でのべたンドリ首長国の先住者の最上位の祖先の構成ーミリとバリという兄弟とモレという姉妹ーにも現れているからである。くわえて、殺されて切り刻まれた身体が作物の種になった、「稲の母」という一般名で知られる女性はニダの子孫とされるが、これもモレの子孫から「稲の母」が生まれたというンドリ首長国で聞かれる神話と重なる（本稿の第 1 節参照）。臆測をめぐらすなら、現在ウング、ングサ、ニダは別々の首長国に分立しているが、以前はひとつの首長国であり、ウング、ングサ、ニダから成る兄妹姉妹はこの「原ウング首長国」における原初対だったのかもしれない。

ウング首長国のプーマルにはンドンド家の成員が就任する。現在のプーマルは男性だが、その前はこの男性プーマルの母、その前は、この母の母方オジ、さらにその前も男性（系譜関係不明）といったように、プーマルは女性でも男性でもよく、継承者の最終的な選定は竹トでおこなわれるという話を、2019 年 9 月 4 日にカンガナラ村のンドンド家の祭祀家屋内でおこなったインタビューの際に聞いた。だが、A 氏によると、プーマルになるのは原則的には男だという。

カンガナラ村の儀礼社は、ウング起源の首長国群における儀礼社の「根幹」(pu'u) であり、数年に 1 度おこなわれる屋根のふき替えに際して、儀礼社のなかで黙して座ることはプーマルの重要な職務である。A 氏には 3 代前の男性のプーマルが女の着る黒い上体衣 (lambu mité) を身につけて座っていた記憶がある。不思議に思った A 氏がその理由をプーマルにたずねると、彼は一言「これはわれわれが祖先に由来することの比喩だ」(ina séna ola ngé wa'u kita) と答えただけだった。A 氏はこの言葉をどう理解したらいいか今も考えあぐねている様

子だった。⁷⁾

A氏がいうように、プーマルに就任するのは男性が原則であり、男性のプーマルが儀礼の際に女装していたとすれば、この事象は2つの異なる方向から比較研究のなかに位置づけることが可能と思われる。

そのひとつは、東南アジア島嶼部のスラウェシ島・ブギス人のビッス *bissu* やボルネオ／カリマンタン島・イバン人のマナンバリ *manang bali* などの両性具有的なシャーマンとの類比である。ブギスの叙事詩『イ・ラガリゴ』(I La Galigo)によると、初代のビッスは、神々の系譜をひき、王国の創出に中心的な役割を果たした英雄サウエリガディン *Sawérigading* の双子の姉妹ウェ・テンリアベン *We Tenriabeng* だった。『イ・ラガリゴ』では、サウエリガディンの姉妹への恋慕と執着に由来するさまざまな出来事をおとして、因果根をはじめとする王国の基礎が築かれていく過程が語られる [Perlas 1996: 82–90]。また、イバンのマナンバリは、戦争の神であり長兄のシンガララン・ブロン *Singalang Buron* の姉妹で、病気治療の神であるイニ・インダ *Ini Inda* が提案し、次兄のラジャ・ムンジャヤ *Raja Menjaya* を無理やり女装させ、病気治療の知識を伝授した、彼女の代役にほかならない [Sandin 1983]。

もうひとつは、ウング起源の首長国群におけるウング首長国の中心的重要性に着目するアプローチである。ティモール島のアトニ人のいくつかの政体は、豊穡儀礼を主宰し、男性だが妊娠した身重の女性に喩えられる不活発な王を中心におき、それを活動的な副王や宮廷外に位置する男性的な首長がとりまく同心円的な構造をもっている [McWilliam 2002: 104–105, 149]。カンガナラ村の根幹の儀礼社の主柱には蜂の巣／巣蜜 (*laba*) を模った木彫品が取り付けられている。そして、四隅の柱や水平材にはヘビ、トカゲ、サソリ、ムカデのレリーフが施されている。これらは神秘的で危険な力をもつ (*bhisa*) 動物であり、リオ語域南部の祭祀家屋にも彫刻されている。ただし、そこには蜂の巣／巣蜜ではなく、女性の乳房の彫刻が施されている。くわえて、リオ人の住む領域 (*sa tiko Lio*) を形容する言葉として「蜜 (*até éro*) と乳 (*até susu*) に満ちた」という表現がある。これらを総合すると、蜜と乳は等価であり、カンガナラ村にある根幹の儀礼社はウング起源の首長国群のなかで、アトニ人の王と類似する中心としての女性の位置を占めているといえるだろう。そうであるなら、数年に1度おこなわれる根幹の儀礼社にかかわる最大の儀礼である屋根のふき替えにおいて、儀礼社と一体化したように、その内部に黙して座るプーマルの衣装が女性のものであるのはむしろ当然である。

先述のように、男女の原型が兄弟姉妹であるなら、この2つの方向からの位置づけは結局はひとつになるのかもしれないが、本稿では示唆にとどめる。

7) 2019年9月4日にインドネシアの家守、皿器の母父首長、現在のプーマルにインタビューをおこなった際、男性のプーマルが女性用の上体衣を着ていたかどうかについてもたずねた。彼らは、そうした事実はないと断言していた。A氏も同席していたが、黙して何も語らなかった。

5. 東 K 方言域の首長国とシッカ王国

5.1 ムブング首長国

東 K 方言域にはムブング首長国 (Tana Mbengu) とムゴ首長国 (Tana Mego) がある (図 1 参照)。両首長国に女性首長はいない。くわえて、東 K 方言域の調査では原初対に関するデータがほとんどえられない。女性首長のいない首長国を女性首長のいる首長国と比較できたのは、このデータのおかげだった。そうであるなら、これまでのような比較研究に東 K 方言域を取り込むことはできない。

東 K 方言域では首長や首長国が活動を停止している。それにともない、首長や首長国に関する知識も大幅に減少している。とりわけムゴ首長国にいえることだが、本稿との関連でおこなうべきだった調査は 2 世代ほど遅れてしまった気がする (同様のことはシッカ王国の領域での調査についてもいえる)。ただし、ムブング首長国での調査からえられた資料には原初対の消失がどのような事象であるかを理解するためのヒントがふくまれているように思える。以下にのべるのはこの可能性の追求である。

東 K 方言域は、シッカ人やシッカ王国と長期にわたって、さまざまな交流があった。このことと直接関係づける必要はないが、後述するシッカ王国の政体は原初対を中心とするものではなかった。

ムブング首長国の海岸にそって東西に広がるパガ Paga 村は、先述のように、カトリック教徒のコミュニティとして 17 世紀初頭には文献に登場する。また、シッカにおけるカトリックの歴史は 16 世紀半ばにさかのぼる可能性がある。

ポルトガルからオランダへのフローレス島の割譲をふくむリスボン条約が 1859 年に締結されるまで、パガにはポルトガル人やトパス Topass (ポルトガル系クレオール) が、他地域のポルトガル人コミュニティとおなじように、教会をかねた要塞を維持しながら居住していたと思われる。パガにポルトガル時代の建造物は現存しないが、海岸沿いの国道北側のゴモジュケ Gomo Jeké とよばれる地区にはかつて要塞があったという伝承がある。また、井戸や建物の資材だったと思われる大きな石が表土近くから数多く見つかる。リスボン条約締結後、オランダはフローレスや西ティモールにおけるカトリックの宣教を継続する政策をとったので [Steenbrink 2003: 71-73, 127; Lewis 2010: 6-7], オランダ領になってからもパガにはポルトガル人やトパスが住みつづけていた可能性もある。

パガには首長たちの上に「王」(Ratu Raja) がいる。「王」に就任するのはパガにやってきたダ・コスタ da Costa という男の父系子孫である。ダ・コスタの父系子孫は「ポルトガル人」(ata Portugis) とよばれ、他のリオ人から区別されている。

最近までパガの王だった人物は 2016 年に 89 歳で他界した V 氏であり、長くジャカルタに

住み、国政レベルの政治家として活躍した。V氏はダ・コスタの歴史を記したノートをもっているという噂を耳にしていたが、生前会う機会にはなかった。遺品を保管しているであろうV氏の妻を探してくれるようにジャカルタ在住の友人に頼んだが、V氏の妻はV氏の親族や友人とは疎遠であり、筆者の期待できるものは何もないというので会いにいったことはない。以下は2017年7月にV氏の近親者であるパガ在住のT氏とジャカルタ在住の2人から聞いた話を要約したものである。

ダ・コスタは、フェルナンデス Fernandes, ダ・シルヴァ da Silva, パレイラ Pereira, ダ・ガマ da Gama, ダ・ロペス da Lopez, ダ・クンハ da Cunha という6人の兄弟とともに海の彼方からフローレスにやってきた。このうちダ・コスタがパガにやってきた。フェルナンデスはフローレス東端のララントウカ Larantuka にいて根をおろした。他の5人はシッカにいき、ダ・シルヴァがシッカ王の祖先になった。彼らがフローレスにやってきた目的は交易ではなく、カトリックの布教だった。パガはフローレスにおけるカトリックの中心地であり、カトリックはパガから東進し、シッカやララントウカに広まっていった。

付言しておく、このT氏の発言は毎年クリスマス後の12月26日にパガでおこなわれていたボブ bobu とよばれる歌劇で表明される主張の反復である。⁸⁾

ダ・コスタをめぐるT氏の語りに姉妹や妻が出てこない、インタビューの際、ダ・コスタは誰を妻にしたかについてたずねてみた。T氏は何も知らなかったが、しばしば問われることがあるのか、「それな…それを知らないことがおれたちの弱みなんだ」といっていた。

パガには王の下に6人の首長 (mosa laki) がいる。この6人のうちの誰が、後述するムブングの弟のパガの子孫にあたるかについてもたずねたが、T氏は知らなかった。

王と6人の首長は「五部二門」(Bhisu Lima Wewa Rua) とよばれる7つの父系集団の長である。そのひとつがダ・コスタの父系子孫からなるビスコジャ Bhisu Koya 家である。五部二門を構成する他の父系集団の名前をT氏をふくむ3人のインフォーマントから聞いたが、どういふわけか無視できない齟齬があり、混乱のもとになるので、ここには記さない。

パガの北側の後背地には「上のムブング」(Mbengu Wawo) とよばれる地域があり、そこにも海の彼方⁹⁾ からやってきた外来者の子孫を標榜する根幹首長がいる。この首長はリオ語域の多くの首長国における根幹首長とおなじように豊穡儀礼の遂行者である。他方、パガでは豊穡儀礼をおこなうことがタブーになっている。

2015年7月4日にインタビューをおこなった根幹首長のK氏によると、海の彼方からやっ

8) 筆者はボブを観たことがない。ボブでは、主の天使からイエスの誕生を知らされた羊飼いが幼子イエスを探しにいく話や、カトリックが在来民とのコンフリクトの果てに受容され、東進し、ララントウカに到達する過程が演じられるという。

9) K氏はポーランド (Polandia) からやってきたと語っていた。外来者の故地としてヨーロッパの地名に言及したインフォーマントはK氏だけである。

てきたのは兄のムブングと弟のパガであり、K 氏はムブングの 13 代目の子孫とのことだった。ムブングは上のムブングに残り、弟のパガは海岸の監視者 (dai ma'u) になったと K 氏がいうので、パガ地域に 6 人いる首長のうちの誰がパガの子孫であるかをたずねたが、K 氏は知らなかった。

T 氏からも K 氏からも、かつて上のムブングとパガとのあいだでおこなわれた戦争の話を聞いた。敵対していた者の名前は異なるが、後ほど詳述する「シッカ王統記」にもムブングにおける戦争の記事があり、そのなかにオルナイ・ダ・コスタ Ornay da Costa という男がパガで初代の王に就任した経緯が記されている。それによると、オルナイはティモール島のオエクシ Oekusi 出身のトパス Topass (ポルトガル系クレオール) であり、パガの住民から加勢を求められて、敵将とその妻の暗殺に成功した。この功績からオルナイはパガの住民に求められて王となった。年代は書かれていないが、これは後出のシッカ最後の王、ドン・トーマス・ダ・シルヴァ Don Thomas da Silva から 5~6 世代前のことだったとされる。パガに定着したオルナイは教会を建設し、カトリックの布教につとめたとシッカ王統記には記されている [Lewis 2010: 350-351]。

シッカ王統記によると、オルナイはアントニオ・デ・ホルナイ Antonio de Hornay という男の息子だった [Lewis 2010: 66-67, 180]。姓としてのダ・コスタとダ (デ)・ホルナイはティモール島で繁栄した外国人を始祖とする 2 大氏族の名前であり、白檀交易とそこからえられた莫大な利益はポルトガル政府ではなく、この 2 大氏族が独占していた [Boxer 1947; Hägerdal 2012]。

K 氏によると、ムブングと弟のパガが海の彼方からやってきたとき、フローレスは無人だったという。そうであるなら、彼らの妻は誰だったかについて問うと、K 氏は「それはいい質問だ」といった後、一瞬何かを考えた様子だったが、「彼らは妻を連れてきた。さもないと、子をえることはできない、地中から女が現れでもしないかぎり。しかし、そんなことはありえない」とつづけた。ここですかさず筆者は彼女たちが姉妹だったかどうかをたずねるべきだったが、そのことに気づいたのは帰路の途中だった。だが、かりに筆者が質問できたとし、K 氏の返答が否定的だったとしても、第 1 節でのべたように夫婦に転化する可能性のある男女が兄弟姉妹であること、ムブリ首長国には一緒にやってきた姉妹と夫婦になったという先住者の起源神話 (本稿第 1 節の②参照) があること、ムブング首長国からムブリ首長国は遠くないことなどから、ムブングとパガの妻を姉妹として理解する解釈に筆者は傾いただろう。

戦争の結果かどうかはともかく、ムブング首長国はパガと上のムブングに分裂している。これが単純な分裂ではないことに注意したい。パガは上のムブングにいる根幹首長の影響力の圏外にあるだけでなく、パガでは豊穡儀礼を遂行することも、豊穡儀礼と関連する施設を整えること一たとえば村落中央の広場に石柱を立てることなど一も禁忌 (piré) になっているからで

ある。それは「邪教徒の習俗」(sara ata kafir)であり、カトリック教徒である自分たちには許されない、とパガの人びとという。

5.2 シッカの外来王権

「シッカ王統記」は、最後のシッカ王であるドン・トーマス・ダ・シルヴァ Don Thomas da Silva (1895–1954) と近い関係にあった2人の臣下が1920年代から数十年にわたって収集したシッカ王権にかかわる口頭伝承の記録である。ルイスは『シッカの外来王』[Lewis 2010]でこの手稿を翻訳し、解説と注釈をくわえている。その学術的な意義は大きい。ドン・トーマスの臣下が仕事をつづけた数十年のあいだにシッカの口頭伝承は急速に失われていったからである [Lewis 2010: xix, 11]。

シッカ王統記の本稿と関連する部分を以下に要約する。海の彼方(ベンガル Benggala あるいはシャム Siam)からやってきたシッカ王の祖先には2つのグループがある。最初の船でやってきたのは「先住者」(orang asli)とよばれる人びとの祖先、リア Ria, ラガ Raga, グネン Guneng という3人の男たちだった。彼らはシッカ王権の発祥の地であるフローレス南岸のシッカ・ナタル Sikka Natar 村の後背地をなす山々に住んだ〔シッカ・ナタル村は図1のリオ語とシッカ語の境界線から東に10数kmの距離にある〕。彼らが結婚した女性の名前は記されているが、彼女たちがどこの誰なのかについて王統記は何ものべていない。またリアたちが到着したとき、フローレス島に在来民がいたのかどうかについても王統記は何も記していない [Lewis 2010: 75–76, 79–80, 210]。

第2の船でやってきたのはラジャ Raja と妻のルバン・シナ Rubang Sina, それに彼らの息子だった。ラジャの息子のスギ Sugi はシッカ Sikka という名の先住者の女を妻にした。その子孫がシッカ人 (ata Sikka) である [Lewis 2010: 77, 83]。

これらの祖先たちはまだ王ではなかった。初代の王は、ラジャの8～15世代後〔系譜により世代が大きく異なる〕の子孫、ドン・アレス・ダ・シルヴァ Don Alesu da Silva である。ドン・アレスは若くしてマラッカに旅に出た。このときマラッカのウォリラ王 (Raja Worilla)¹⁰⁾の息子、アウグスティニュ・ダ・ガマ Augustinyu da Gama が同行した。ドン・アレスは、マラッカでウォリラ王の庇護のもと3年間の教育を受け、洗礼後、ダ・シルヴァ姓を名乗るようになった。そして、フローレスで王となるべく、ウォリラ王から王権のレガリアや財物を与えられ、アウグスティニュとともに帰還した。こうしてドン・アレスはシッカ王となり、アウグスティニュはカトリックの伝道者となった [Lewis 2010: 66–68, 89–91, 131, 154]。

ドン・アレスがウォリラ王から受け取った財物にはたくさんの象牙がふくまれていた。ドン・アレスは、この象牙を「土地の根幹」(tana pu'ang)に与えるために、フローレスの中東

10) ルイスは、ウォリラがポルトガル人名のヴァレラ Varela の訛音だろうと推測しているが、ヴァレラあるいはウォリラという名のマラッカ王はいなかったとのべている [Lewis 2010: 94]。

部をめぐり歩いた。ドン・アレスの曾祖父のモアン・バタ・ジャワ Mo'ang Bata Jawa は各地に割拠する有力首長を「土地の根幹」に指名していたが、ドン・アレスは彼らにマラッカから持ち帰った象牙のうちから1尋以上の長さのものを与えた。この象牙は「象牙の帆柱」(bala mangun) とよばれる [Lewis 2010: 91, 252]。

王統記には「象牙の帆柱」を受け取った「土地の根幹」の住む45の村があげられているが、そこにはリオ語域の有力村が15ほどふくまれている [Lewis 2010: 303-304]。これらの村々がシッカ王国の領域に組み込まれたことはないので、これを差し引くと「土地の根幹」は30人前後になる。冒頭でのべたように、シッカ語域はリオ語域よりも狭い。また「土地の根幹」は豊穡儀礼の主宰者である [Arndt 1933: 82-89, 91-107]。これらを総合すると、「土地の根幹」の「土地」というのはリオ語域の首長国に相当する在来政体であり、「土地の根幹」はリオ語域の「根幹首長」と類似の存在であるという推測がなりたつ。

「象牙の帆柱」の下賜についてはいくつかの解釈が可能である。そのひとつは「帆柱」という言葉に着目する解釈である。「帆柱」を第3節でのべたリオ語表現の「アウ竹の帆柱とともに下り、船板とともに降る」にふくまれている「帆柱」と関連づけるなら、「象牙の帆柱」は無主地に住み着いた者の先住性の象徴であり、象牙の下賜は「土地の根幹」の個々の領地への先住性をシッカ王が承認したことの証だったということになる。

もうひとつは「象牙の帆柱」の下賜を婚資の支払いと関連づける解釈である。象牙は現在にいたるまでシッカ語域における婚資の最重要の品目である。また、リオ語域におけるのと同様に、適切な質と量の婚資が支払われないと、生まれた子は母方に帰属するが、婚資を支払う慣習が導入されたのはドン・アレスの3～5世代後の女王ドナ・アグネス Dona Agnes の治世とされる [Lewis 2010: 101-103]。そうであるなら、先住者の女シッカを妻にしたスギは婿入婚をおこなっており、スギの子孫は婿入婚タイプの未分型におけるように、先住者集団に埋没していたのである。¹¹⁾ だが、ドン・アレスから始まる王統(王位継承のライン)やドン・アレスを始祖とする父系リネージ、「偉大な家」(Lepo Geté)は、ドナ・アグネスの治世よりも前に成立している [Lewis 2010: 58]。これらのことを考えあわせるなら、「象牙の帆柱」の下賜は、婚資を支払う慣習の導入とそれにとまなう出自集団への帰属方式の変更に先立ち、王統だけを先住者集団から分立させる支払いだったということになるだろう。

5.3 脱オーストロネシア化

象牙の帆柱の下賜による先住者集団からの王統の分立は、婿入婚型の未分型を分岐型に転換させたという意味ではない。シッカ王権は原初対とは無関係に成立している。シッカ王統記は、原初対として機能してもよさそうな、ラジャが婿入りした先住者の女シッカとその兄弟

11) ルイスは、インフォーマントたちがこの状況をシッカ語域の東端に住む母系のタナアイ人 (Ata Tana 'Ai) の慣習に比定するのべている [Lewis 2010: 85]。

との関係について、先の要約でのべたこと以外は何も語っていない。シッカ王権は、マラッカの王という外部勢力がドン・アレスをフローレスの王として指名することによって成立したのであり、それはいわばフローレスにおけるウォリラ王の代理者なのである [Lewis 2010: 101-103]。それゆえ、その政体に原初対が絡みついていないのはいわば当然といえるだろう。

リオ語域でも象牙は大きな価値をもつ財物であり、多くの場合、神秘的な力をもつ (bhisa) 家宝として祭祀家屋の奥まった場所 (wisu lulu) に安置されている。しかし、その数はシッカ語域よりも圧倒的に少なく、婚資の主要品目でもない。リオ語域では象牙ではなく、金の装身具が婚資の主要品目になっている。ムング首長国はリオ語域内にあるが、金の装身具がシッカ王権における象牙のような役割を果たしていたことの確証はえられていない。

パガの王権と金の装身具との関係については五部二門の起源や構成とともにさらに調査をつづけてみるべきだが、ここで指摘しておきたいのは、毎年クリスマス後の12月26日におこなわれていたボブという歌劇において、ダ・コスタを始祖とするビスコジャ家に保管されているキリストの磔刑像 (Du'a Lima Repa) が運び出され、王とともに儀礼的プロセッションがおこなわれていたことである。¹²⁾ この儀礼の視覚的効果は明らかだろう。パガの王は儀礼的プロセッションの進行とともに、カトリック教義の中心と関係づけられ、他の首長たちと差異化されていたのである。

シッカとパガの王権は原初対とは無関係に成立している。前稿以来論じてきたように、また次節でも補足してのべるが、在来政体と原初対との固い結びつきはオーストロネシア諸族に広範にみられる。そうであるなら、在来政体が原初対から分離することを「脱オーストロネシア化」(de-Austronesianization) とよんでもいいだろう。シッカやパガの王権の事例が示すように、脱オーストロネシア化は、原初対もろとも在来政体が跡形もなく消失してしまう近現代的な変化ではなく、両者が分離する契機や経緯にかかわる情報をともなっている場合がある。本節で素描した原初対の比較研究にもとづくアプローチは、こうした契機や経緯を明らかにするうえでも有効と思われる。

6. さらなる比較と展望

前稿と本稿でおこなった比較研究は、中部フローレスにおけるフィールドワークにもとづいていることはいうまでもないが、オーストロネシア諸族の民族誌を読み進めるなかで、結婚によって分離されない兄弟姉妹が政体の中心をなしている多くの事例を知ったことから大きな刺激を受けている。すでに言及した事例でいえば、第4節でのべたボルネオ／カリマンタン島のイバン人やスラウェシ島のプギス人の両性具有のシャーマンの起源譚がそれにあたる。

12) 同様のプロセッションは復活祭 (Paskah) 前の聖金曜日 (Jumat Agung) にもおこなわれている。

この両島とともに東南アジア島嶼部の中核域を構成するジャワ島で語られてきた、豊穡の源泉である稲の女神デウィ・スリ Dewi Sri とジャワの初代の王の起源を物語る一群の口頭伝承は、異性として強く惹かれあう神々の系譜に連なる双子の兄弟姉妹（Sri と Sadana）や彼らのインセストを中心に物語が展開される点で [Headley 2004: 87, 109–119, 136], シャーマンの起源譚をふくむプギスの叙事詩『イ・ラガリゴ』と大きな共通性がある。ジャワ島の東に隣接するバリ島におけるデウィ・スリの起源譚はジャワにおけるものとは相当異なっているようだが、男女の双子をめぐる慣習には同様のテーマが再現する。すなわち、男女の双子は、平民の場合には胎内で近親相姦を犯しているとされ、村から追放されるが、王族の場合には神のように妻とともに産まれてきたといわれ、将来の結婚（ロイヤル・インセスト）を前提に育てられていた [Belo 1935]。最近の西島 [2020] の研究が端的に示すように、東南アジア島嶼部の中核域には本稿の延長上で比較の対象にすべき歴大な事象群が広がっている。

だが、東南アジア島嶼部の西域でも原初対が政体の中心と結びつく事例を見つけることはそう難しくないように思える。たとえば、スマトラ島のカロ・バタック Karo Batak 人の王がもつ、降雨や戦争の呪術等で使われる杖は、おたがいの顔がわからなくなっていたために結婚してしまった兄弟姉妹が変身し、一体化した樹木を削り出して作られたとされる [Singarimbun 1975: 51–52]。また、トバ・バタック Toba Batak 人の神話は人間や王国の起源を神々の系譜に連なる双子の兄弟姉妹のインセストに求めている [Bemmelen 2018: 42]。そして、スマトラ島西岸沖合のニアス島では双子の兄弟姉妹間のインセストは神々にのみ許される神々の特権とみなされてきた [Leertouwer 1984]。

本稿は東南アジア島嶼部東域のフローレス島における比較研究を中心とするものであり、数多くある同地域からの類例の列挙はひかえ、以下ではポリネシアの事例に言及することで、本研究の外縁を押し広げることを試みたい。

サモア Samoa 諸島、ティコピア Tikopia 島、プカプカ Pukapuka 島では高位の男性首長の姉妹や娘を未婚の女性首長に就任させる慣習のあることが古くから報告されてきた。この場合の「未婚」は婚出していないだけでなく、斎王や祝女のように [馬淵 1974a: 181–182, 1974b: 223; 榎村 2017], 婿入りも性関係も禁止されていることを意味する。その職務の記述は具体性に欠ける場合もあるが、これらの地域における女性首長は農耕、戦争、遠洋航海等にかかわる儀礼で重要な役割を果たしていたといえるだろう。

姉妹を処女にとどめる点で近親婚型や婿入婚型と異なる原初対を「処女型」(virgin type) と名付け、他と区別することにしよう。

ポリネシアにおける原初対のあり方は東南アジア島嶼部と少なくとも同程度に多様である。上にのべた「処女型」にくわえ、ハワイやソシエテ諸島の王族や首長層ではロイヤルインセストがおこなわれていた [Beaglehole and Beaglehole 1938; Davenport 1994; Gunson 1987; Firth

1967]. また、婿入婚型の未分型を思わせる、つぎにのべるトンガ島の古典的な事例もある。

トンガでは王 (tu'i Tonga) の最年長の姉妹が女性首長 (tu'i Tonga fefine) に就任する。祖先は一般に「根本」(テフィット tefito) とよばれるが、王 (とその祖先) はそのさらに根本に位置する [Biersack 1996: 241; Gifford 1929: 30, 79]. テフィットは中部フローレスのプウ pu'u (根幹) の血縁語ではない。だが、テフィットとその血縁語は、ポリネシアにおける多くの言語で、プウと大きく重なりあう「樹木の基部、基礎、起源、発端、根、根拠」などの意味で使われてきた [Polynesian Lexicon Project Online¹³⁾; Firth 1957: 217-218].

トンガの初代の女性首長に就任したのは、第 11 代の王であるトゥイタトゥイ Tuitatui の姉妹のラトゥタマ Latutama だった。トゥイタトゥイはその数々の事績から推して最も偉大な王だった、とギフォードはのべているが、その一端はトゥイタトゥイが姉妹のラトゥタマを妻にしたことに現れている。トンガ初代の王の父は、天上界の神タンガロア Tangaloa の息子だが、神々の系譜には双子の兄弟姉妹間のインセストが繰り返される。ギフォードは、トンガにおける神話のモチーフにインドネシアとの共通点が多いことに驚いているが、同様のコメントは兄弟姉妹のインセストが繰り返される台湾のオーストロネシア系在来民、アミ Ami 人の神々の系譜についてもいえるだろう [Gifford 1924: 19, 29, 46-47, 1929: 53, 79; 馬淵 1974c, 1974d; Parnickel 2000; 杉島 2017: 156-157].

ラトゥタマにつづいて女性首長に就任したのはラトゥタマとトゥイタトゥイのあいだに生まれた娘だったが、その後は不在の期間が長く、第 30 代のトンガ王の治世になって、その姉妹であるシナイタカラ Sinaitakala が 3 代目の女性首長に就任したとされる。

シナイタカラは臣下をフィジーに送り、タプオシ Tapuosi というフィジーの男を強制的に連行して夫にした。以後、19 世紀前半の第 37 代トンガ王の治世まで 5 人の女性首長がタプオシの子孫であるフィジー人を夫にしていた [Gifford 1929: 13, 34, 79-80, 137; Bott 1982: 106].

トンガ、サモア、フィジーのあいだには古くから交流があったが、継続的におこなわれていたわけではなかった。くわえて、フィジーはトンガから直線距離で 750 km ほど離れており、言語的にも大きく異なる外国だった。

トンガの女性首長が外国人を夫にしていたのとよく似た事象が中部フローレスにもあることをわれわれは知っている。ンドリ首長国の先住者の女モレには外国人が婿入りしていた。また、デトゥンガリ首長国の女性首長には外国といえるほど遠方にある首長国出身の男が婿入りしていた。

これまでの記述から明らかなように、原初対を標榜する言説には、無主地への最初の定着者として、ある範囲の土地を領有しているという主張がふくまれている。他方、婿入りした外国

13) <<https://pollex.shh.mpg.de/entry/tafito.a/>> (accessed on December 20, 2019)

人は、故地でもっていたような土地に対する権利を婿入先では一切もっていない。くわえて、故地や親族から遠く離れ、そこでの自己の位置づけ等、人格を構成する要素の大半を失っている。これらを考えあわせるなら、名前や／あるいは身元の知られていない、ブー首長国の先住者の女 Q の夫、デトゥンガリ首長国の女性首長の夫ベケ、ウング首長国の先住者の女 Z の身元不詳の夫ガディを外国人の入婿の仲間にくわえることができるだろうし、初期のハゴワウォが性交渉をもったとされる不特定多数の男たちの匿名性も同様の観点から理解できるだろう。

トンガの女性首長の夫が外国人だったことについては島内での政治状況に起源を求める説がトンガ研究者から提出されている [e.g. Biersack 1982: 201–202; Bott 1982: 68]。筆者はトンガの民族誌や歴史文書に専門的知識をもたないが、比較研究の視点に立つと、こうした解釈にはつぎのことが考慮されていないとはいえる。ポリネシアには処女型、近親婚型、婿入婚型が並存している。そうであるなら、処女型や近親婚型と通底する何かを探ることの一環として女性首長の外国人の夫は理解されるべきだろう。筆者が傾いているのは、上にのべた中部フローレスにおける入婿の議論を延長し、フィジー人の夫がトンガ人の男ならばもっているはずの人格の構成要素の多くを欠いた存在だったという理解である。そうであればこそ、タブオシは、自分の意志とかかわりなく、強制的にトンガに連れてこられたのだろうし [Gifford 1929: 80]、ンドリ首長国のモレの夫も自分の意に反して帰国を許されなかったのである。近親婚型でも処女型でも姉妹の夫は無化し、不在となる。この状態は人格の構成要素の極限的な喪失状態として理解できるかもしれないが、結論を急ぐ前にもう少し資料の探索をおこなってみるべきだろう。

これまでのべてきたことのなかにすでに含意されているが、本稿の延長上で今後おこなっていくべき研究には大まかに 2 つの方向性がある。

そのひとつは比較の範囲の拡大である。今後とも中部フローレスでの調査は継続するが、東南アジア島嶼部から台湾（のオーストロネシア系在来民）、ミクロネシア、フィリピン、ニューギニア（の内陸部）をのぞくメラネシアに比較研究の対象を広げたいと考えている。なかでもフィジーとの比較研究は避けて通れないだろう。フィジーは、本研究と関連する記述をふくむ民族誌が数多くあるだけでなく、フローレス島とほぼおなじ面積の島嶼群に多くのバリエーションがひしめいている。また、フィジーは海の彼方からやってきた男の到来を中心に在来政体の理解をはかろうとするサーリンズの外来王論の発祥の地でもある [Sahlins 1981]。

こうした比較研究の進展とともに現れてくる課題は、学的伝統や研究者の思い込みに由来する不用意な研究上の前提を批判的に検討することである。詳しくは別稿にゆずるが、サーリンズの外来王論は、（本稿のターミノロジーを使つての表現になるが）婿入婚タイプの分岐型の事例を特権的に重視し、他のタイプを等閑視している。それゆえ、フィジー研究者はフィジーに内在する多様なバリエーションが無視されているという批判をおこなってきた [e.g. 春日

2001; Kaplan 1995]. だが、それ以上に問題なのは、サーリンズへの批判をふくむこれらの議論が在来政体にかかわるものでありながら、原初対に焦点をあわせるという発想を欠いていることである。くわえて、サーリンズの外来王論では政体と親族が区別されていない。そのために、外来王を受妻者 (wife-taker)、先住者を与妻者 (wife-giver) とみなし、両者のあいだには婚姻連帯＝縁組が成立しているように論じられる [Sahlins 1981, 2008: 177]。だが、前稿と本稿をとおして明らかにしてきたように、政体と親族は截然と区別して考えるべきである。原初対 (結婚によって分離されない兄弟姉妹) は政体の中心をなすが、兄弟姉妹は親族の位相では結婚によって分離されなければならないのである。

『オーストロネシア諸語比較辞典』[Blust and Trussel 2010-] には、リオ語で村を意味するヌア nua に相当する、アジア太平洋地域の 73 言語の血縁語 (再建形: *banua, 以下「*バヌア」と表記) が掲載されている。それらの語義は土地、地域、村、家、国などのように多様だが、比較の範囲を広げていくと、トンガ、サモア、マオリといったポリネシアのいくつかの言語におけるヌアの血縁語は胎盤の意で使われていることがわかる。このことからブラストとトラッセルは、*バヌアが単なる一定範囲の土地や空間ではなく、「人間コミュニティの生命維持システム」(the life support system of a human community) としての土地を表わしていたとのべている [Blust and Trussel 2010-¹⁴⁾; cf. 中村 2019: 218–223; Reuter 2002: 29]。こうした比較から生まれる相互参照 (comparative cross-reference) によってヌアの理解は深化する。すなわち、ヌアは人間の生活が営まれる単なる場ではなく、自分を育ててくれた／くれている祖先と土地が混然一体となった親族の領域なのであり、この認識と関連づけることで、リオ人がヌアに示す深い愛着と一体性、焦がれるような懐かしさをこめてヌアを語ることの歴史的重みと背景が感得できるようになる。したがって、ヌアは二次元的にはタナ tana (土地、大地、領地)＝首長国の一部をなすものだが、分離主義や反目が渦巻く政体としてのタナとは質的に大きく異なっているのである。

比較から生まれる相互参照によって事象理解を深化させるとともに、不用意な研究上の前提を批判的に検討することは比較研究の最良の一部をなす。本稿では、中部フローレスのリオ語域での民族誌研究をおこなうとともに、そこからえられる知見を他のオーストロネシア諸族の類似する事象と関係づけることを試みた。紙幅の関係で、相互参照の状態におかれた諸事象がはらむ含意を細目にわたって列挙することはできなかったが、そこには原理的な困難もある。リオ語のヌアとポリネシアにおけるヌアの血縁語の例が示すように、相互参照の状態におかれた諸事象がみずから何かを語り始めることはない。そこからどのような含意を感得できるかは、研究者の関心や予備知識にかかっている。それゆえ、本節でのべたことが中部フローレス

14) <https://www.trussel2.com/ACD/acd-s_b.htm#25129> (accessed on April 17, 2020)

の民族誌研究との関係で益のない余計な文章のようにみえてしまう読者が出てくることも避けがたい。

付 記

本稿は科学研究費補助金をえておこなった「オーストロネシア諸族における在来政体の比較研究—東南アジア島嶼部を中心に」（研究課題／領域番号：18K01190，研究代表者：杉島敬志）の研究成果の一部である。

本稿の初期草稿に対して植野弘子氏，榎村寛之氏，細田尚美氏，加藤裕美氏，佐久間香子氏，西島薫氏から有益なコメントをいただき，その多くを最終稿に反映させた。記して感謝したい。

引 用 文 献

- 青木恵理子. 2005. 『生を織りなすポエティクス—インドネシア・フローレス島における詩的語りの人類学』世界思想社.
- Arndt, Paul. 1933. *Gesellschaftliche Verhältnisse im Sikagebiet (östl. Mittelflores)*. Ende: Arnoldus-Drukkerei.
- Beaglehole, Ernest and Pearl Beaglehole. 1938. *Ethnology of Pukapuka*. Bernice P. Bishop Museum Bulletin 150. Honolulu: The Museum.
- Belo, Jane. 1935. A Study of Customs Pertaining to Twins in Bali, *Tijdschrift voor Indische Taal-, Land- en Volkenkunde* 75(4): 483–549.
- Bemmelen, Sita T. van. 2018. *Christianity, Colonization, and Gender Relations in North Sumatra: A Patri-lineal Society in Flux*. Verhandelingen van het Koninklijk Instituut voor Taal-, Land- en Volkenkunde 309. Leiden and Boston: Brill.
- Biersack, Aletta. 1982. Tongan Exchange Structures: Beyond Descent and Alliance, *Journal of the Polynesian Society* 91(2): 181–212.
- . 1996. Rivals and Wives: Affinal Politics and the Tongan Ramage. In J. J. Fox and C. Sather eds., *Origins, Ancestry and Alliance: Explorations in Austronesian Ethnography*. Canberra: Research School of Pacific and Asian Studies, The Australian National University, pp. 241–282.
- Bott, Elizabeth. 1982. *Tongan Society at the Time of Captain Cook's Visits: Discussions with Her Majesty Queen Salote Tupou*. Wellington: The Polynesian Society.
- Boxer, C. R. 1947. *The Topasses of Timor*. Amsterdam: Koninklijke Vereeniging Indisch Instituut.
- Davenport, William H. 1994. *Pi'o: Enquiry into the Marriage of Brothers and Sisters and Other Close Relatives in Old Hawai'i*. Lanham, Md: Lanham University Press of America.
- 榎村寛之. 1996. 『律令天皇制祭祀の研究』塙書房.
- . 2017. 『斎宮—伊勢斎王たちの生きた古代史』中公新書 2452. 中央公論新社.
- Firth, Raymond. 1957. *We, the Tikopia: A Sociological Study of Kinship in Primitive Polynesia*, 2nd ed. Boston: Beacon Press.
- . 1967. *Tikopia Ritual and Belief*. London: George Allen and Unwin.
- Gifford, Edward Winslow. 1924. *Tongan Myths and Tales*. Bernice P. Bishop Museum Bulletin 8. Honolulu: The Museum.
- . 1929. *Tongan Society*. Bernice P. Bishop Museum Bulletin 61. Honolulu: The Museum.

- Gunson, Niel. 1987. Sacred Women Chiefs and Female 'Headmen' in Polynesian History. *The Journal of Pacific History* 22(3): 139-172.
- Hägerdal, Hans. 2012. *Lords of the Land, Lords of the Sea: Conflict and Adaptation in Early Colonial Timor, 1600-1800*. Verhandelingen van het Koninklijk Instituut voor Taal-, Land- en Volkenkunde 273. Leiden: KITLV Press.
- Headley, Stephen C. 2004. *Durga's Mosque: Cosmology, Conversion and Community in Central Javanese Islam*. Singapore: Institute of Southeast Asian Studies.
- Heuken, Adolf. 2008. The Solor-Timor Mission of the Dominicans, 1562-1800. In Jan Sihar Arintonang and Karel Steenbrink eds., *A History of Christianity in Indonesia*. Studies in Christian Mission 35. Leiden and Boston: Brill, pp. 73-97.
- Kaplan, Marth. 1995. *Neither Cargo Nor Cult: Ritual Politics and the Colonial Imagination in Fiji*. Durham and London: Duke University Press.
- 春日直樹. 2001. 『太平洋のラスプーチン・ヴィチ・カンパニ運動の歴史人類学』世界思想社.
- Leertouwer, L. 1984. Contention and Alliance of Gods: The Nias Case. In H. G. Kippenberg *et al.* eds., *Struggles of Gods: Papers of the Groningen Work Group for the Study of the History of Religions*. Berlin, New York and Amsterdam: Mouton Publishers, pp. 177-191.
- レヴィ＝ストロース, クロード. 1977. 『親族の基本構造』馬淵東一・田島節夫監訳, 番町書房.
- Lewis, Douglas E. 2010. *The Stranger-kings of Sikka*. Verhandelingen van het Koninklijk Instituut voor Taal-, Land- en Volkenkunde 257. Leiden: KITLV Press.
- 馬淵東一. 1974a. 「姉妹の霊的優越」『馬淵東一著作集 第三巻』社会思想社, 163-191.
- . 1974b. 「オナリ神をめぐる類比と対比」『馬淵東一著作集 第三巻』社会思想社, 193-223.
- . 1974c. 「パングツァハ族の神々」『馬淵東一著作集 第三巻』社会思想社, 283-302.
- . 1974d. 「パングツァハ族の神々 (続)」『馬淵東一著作集 第三巻』社会思想社, 303-317.
- McWilliam, Andrew. 2002. *Paths of Origin, Gates of Life: A Study of Place and Precedence in Southwest Timor*. Verhandelingen van het Koninklijk Instituut voor Taal-, Land- en Volkenkunde 202. Leiden: KITLV Press.
- 中村 潔. 2019. 「起源の場所一バリーにおける土地のエージェンシーを考える」杉島敬志編『コミュニケーション的存在論の人類学』臨川書店, 199-232.
- 西島 薫. 2020. 「神器が織りなす政体—西部カリマンタンのダヤック人王権の事例から」『東南アジア研究』57(2): 109-135.
- Parnickel, Boris. 2000. Taiwanese Incest Myths and Their Possible Western Malayo-Polynesian Derivates, *Oriente Moderno* n.s. 19(2): 287-299.
- Pelras, Christian. 1996. *The Bugis*. Cambridge, Mass.: Blackwell Publishing.
- Reuter, Thomas. 2002. *Custodians of the Sacred Mountains: Culture and Society in the Highlands of Bali*. Honolulu: University of Hawai'i Press.
- Sahlins, Marshall. 1981. The Stranger-king or Dumézil among the Fijians, *The Journal of Pacific History* 16(3): 107-132.
- . 2008. The Stranger-king or, Elementary Forms of the Politics of Life, *Indonesia and the Malay World* 36: 177-199.
- Sandin, Benedict. 1983. Mythological Origins of Iban Shamanism, *The Sarawak Museum Journal* 32: 235-250.
- Singarimbun, Masri. 1975. *Kinship, Descent, and Alliance among the Karo Batak*. Berkeley: University of

- California Press.
- Steenbrink, Karel. 2003. *Catholics in Indonesia, 1808–1942: A Documented History, Volume 1: A Modest Recovery 1808–1903*. Verhandelingen van het Koninklijk Instituut Voor Taal-, Land-, en Volkenkunde 196. Leiden: KITLV Press.
- 杉島敬志. 2017. 「インドネシア・中部フローレスにおける未婚の女性首長をめぐる比較研究—オーストロネシア研究の視点から」『アジア・アフリカ地域研究』16(2): 127–161.
- 坪内良博・前田成文. 1977. 『核家族再考』弘文堂.
- Visser, Bernard J. J. 1925. *Onder Portugeesch-Spaansche Vlag: De Katholieke Missie van Indonesië 1511–1605*. Amsterdam: N. V. de R. K. Boek-Centrale.
- Wurm, S. A. and Shirô Hattori eds. 1981-1983. *Language Atlas of the Pacific Area*. Canberra: Australian Academy of the Humanities in collaboration with the Japan Academy.
- 八木 透. 2001. 『婚姻と家族の民俗的構造』吉川弘文館.

オンライン資料

- Blust, Robert and Stephen Trussel. 2010-. *The Austronesian Comparative Dictionary, web edition*. <<https://www.trussel2.com/ACD/>> (accessed on April 17, 2020)
- Polynesian Lexicon Project Online. 2010. <<https://pollex.shh.mpg.de/entry/tafito.a/>> (accessed on December 20, 2019)